

サイエンスの本棚を散策すれば ⑤

レンズ磨きに殉じたスピノザの技巧

志村幸雄 (しむら・ゆきお)

匠の技を持った哲学者

17世紀のオランダは世界史上有数の海洋国家として覇権を競い、交易を基盤にした経済が繁栄を極めた。その豊かさは芸術や学術の分野にも及び、オランダ絵画の巨匠レンブラントやフェルメールをはじめ、顕微鏡の発明者レーウエンフックや哲学者のスピノザを輩出した。

なかでもポルトガル系ユダヤ人の交易商の子としてアムステルダムに生まれたスピノザは、文豪ゲーテをして「自分に影響を与えたのはシェイクスピアとスピノザだけ」と言わしめた異色異能の人物。幼年期からユダヤ教団所属の学校で教育を受けたものの、西欧的思想に傾倒するうちに「神即自然」すなわち自然は神が創ったものではなく、神そのものであるとの汎神論的哲学観を提唱、デカルト後の近代哲学の継承者としての地歩を築いた。その肖像が1970年代の1000ギルダー紙幣(当時の最高額面)に使われ、銅像が哲学者ゆかりのアムステルダムやハーグに建立されている。

るの、それだけ国民的人気が高いことを物語っている。

前回では、前記のフェルメールとレーウエンフックが同じ年(1632年)に同じ土地(デルフト)に生まれ、互いに交流があったことを述べた。ところが今回の主人公バルフ・デ・スピノザも出生地こそ違うが、同じ年に生まれている。比較的狭い国土に同時代人として生を受けたとすれば、何らかの関わり

合いがあってもおかしくない。卑近な例として、『スピノザ往復書簡集』(島山尚志訳、岩波文庫)には、友人・知己19人と交わした全書簡が収録されているが、その1つにスピノザから「ヨハネス・ファン・デル・メール」に宛てた手紙がある。文面は「友よ」で始まり、賭けの確率を説明する内容だが、実はこの相手の名前こそフェルメール



スピノザ自画像『フェルメールとスピノザ(永遠)の公式』(以文社刊)

がある」とマルタンは指摘し、「この出会いを仲介したのは、顕微鏡のルーペをこの哲学者から受け取ることになっていったレーウエンフックであろう」とつけ加える。

ールの本名なのだ。ただし、訳者の説明では「アムステルダムの商人で1678年なお生存していた」とあり、フェルメールの没年が75年だったことを考えると、人違いの可能性が大きい。オランダには、これと同名の人が多いという指摘もある。

それよりももっと関係性の糸で結ばれているのは、スピノザが教団から無神論者として破門された1656年当時、自らの生計を立てる手段として「レンズ磨き」を選んだことだ。この仕事はレーウエンフックが本業とし、すでにそれなりの実績を上げていたが、単にそれを後追いつけるという単純な理由ではなかった。

そのスピノザは1677年、44歳の若さで他界する。レンズ磨きの際に生じた粉塵で肺が冒されたのが死因だった。ただ、その死を契機にして2年前に完成していたスピノザ哲学の集大成

「科学者としての才能にも恵まれたスピノザは、当時の最先端技術の顕微鏡や望遠鏡に格別の関心を払い、前出の往復書簡集でもドイツの哲学者で数学者でもあるライプニッツからの光学に関する手紙に専門性に富んだ回答をしている。また、ドイツの自然哲学者オルデンブルクへの手紙では、自らのレンズ磨きに触れて「球面レンズの場合は、どんな機械を使うよりも直接手で磨いた方がもっと安全でもっとうまくゆくことを私は経験でよく存じております」と書いている。

思索に生きた哲学者は、匠の手法でも優れた能力を持ち合わせていたのだ。

『天文学者』のモデル説も

この種の事例は、スピノザとレーウエンフック、さらにはフェルメールとの関係性の強さを予感させるに十分だが、それを極めて具体的に例証しているのが、ジャン・クレ・マルタン著『フェルメールとスピノザ(永遠)の公式』(杉村昌昭訳、以文社)だ。現代フランスの哲学者で作家の著者は「現実とフィクションとの往還行為のなかから、スピノザとフェルメールの創造的交錯の核心に肉薄(訳者あとがき)する。その例として、フェルメールが1668年に制作した「天文成『エティカ』が、生前の妨害や抑圧から解放されて、死後間もなく遺稿集の一部として公刊される。スピノザはその最後の1行を「とにかくすぐれたものは、す

学者」は、制作時点で「哲学者」とネーミングされていた事実に着目する。哲学者といえば、まずスピノザだが、実際、スピノザのクロッキー(多くの場合、自画像)とこの絵の主人公の間には、髪型、鼻、額などに類似性があり、着衣も完全に同じと見る。したがって、世の中に流布している「レーウエンフック・モデル説」に対しては、「レーウエンフックの多数の肖像画とのあいだにまったく類似性がない」と一蹴し、「カメラ・オブスキュラのような」道具を持っていたフェルメールが、似ていない肖像画を描くだろうか」とダメを出す。

では、そのレーウエンフックとスピノザの関係はどうか。当時のオランダではスピノザのレンズ職人としての名声が高く、レーウエンフックは多種類の顕微鏡を製作するため、当然のごとくスピノザから受け取ったレンズを使った、と推測する。現に最近発表された論文では、レーウエンフックによる赤血球の発見は、そのレンズを用いて初めて可能になった、と報告されている。

マルタンは、さらなる仮説として、フェルメールはすでに述べたようにカメラ・オブスキュラを愛用していたが、この暗室には顕微鏡や望遠鏡のレンズとは異なった機能を持つ、大きくて希有であるとともに困難である(工藤喜作他訳、中公クラシックス)と意味深長に締めくくっている。(技術評論家)